

陸前高田

医療は求められたところに行くのが一番いいと思って、陸前高田に来た

話し手——吉田和子さん

聞き手——今田葵

聞いた日——二〇一四年八月八日



東大は私の庭だった

吉田和子です。昭和二九年一月二七日生まれで、このあいだ、還暦を迎えました。東京の文京区弥生町、東京大学の弥生門の前にあった家で育ちました。東大は私の庭でした。構内に三四郎池っていう池があるんですけど、幼稚園の頃は、その池を一周するのが冒険の旅でした。弥生門と龍岡門を通って東大の中を抜ける、御茶ノ水行きと上野行きのバスがあったの。幼稚園のスクールバスが迎えに来てくれたので、私は幼稚園のときは毎朝、弥生門から入って龍岡門から出ていた。毎日、東大に出入りするの。幼稚園の時から、入っちゃ出、入っちゃ出っていう生活をしてきました。

小学校は文京区の西片町ってところにある誠之小学校に入りました。子どもの足で二〇分ぐらい行くところだったんだけど、東大の農学部が本校の右側にあって、その本校と農学部の間を道を通って学校に通ったの。その通

学路の左側・東大本校の壁には、大きな蜘蛛の巣があって、そういうのをビリビリビリと剥がしてみたり。そうやって散歩がてら遊びながら行けるようなところだったのね。農学部ってところは、自由に中に入れちゃうわけ。研究のためにいろんな植物が植えてあって、なんかすごい楽しい場所。秋になると、種がプチプチってつぶのがぼろぼろと落ちて、それを集めておまごで遊ぶ材料にしたりとか。そういうところを通って、東京なただけでいろんな冒険をしながら楽しく学校に通ってました。もっと冒険したい時は、帰り道に、誰も人がいない建物の中を通過って出てくるっていう遊びをみんなでしたり。そういう風に、東大は変な話、本当に遊び場でした。遊び場なんだけど怖い場所でもあって。東大病院には霊安室とかそういうのもあるから、そっちの方の道は怖くて行けないし、みんなに「そっからお化けが出るぞ」とか言われるじゃない。東大が目の前にあっただけの子どもの時代が一番楽しかったかな。今でもあまり変わらないで、ビルが建つわけじゃなくて、昔ながらの

雰囲気を守っている街です。

女子校で、ワクワクとスリルを感じるような生活をした

六年生の時に、うちの母親が私立に入ってもらいたいって思ったらしくて、東京の赤坂の一等地にある「山脇学園」っていう女子校を受けなさい」って言って。「私ね、小学校の時に一緒だった男の子とかみんな仲良く中学行きたいから嫌だ」って言ったの。でも「一応受けなさい」って言われて、受けたの。別にできたとか何も思っていないけど、結局応募者がそんなに多くなくてなんか受かったちゃって。中学生・高校生の先輩たちがね、すごい素敵だったのよ。おさげが似合って、かっこよいお姉さまに見える。あとすごく制服が素敵だったのね。「この制服着るならいいなあ」と思って、入りました。

中学校の時は髪の毛が短かったんだけど、その学校はおさげをしなくちゃいけない学校なので、ずっと伸ばした。前髪も切っちゃいけないの。ずっと伸ばして私は高

三までなるべく切らないようにした。でも髪の毛が厚くて多かったの、そぎ切りして。ゆるく編んでるのがトレンディっていうか素敵っていうのがあって、そんな雰囲気先輩の様子を見て、真面目にきちっと結ぶ髪じゃなくて、自由な編み方をして六年間通いました。

クラブはね、フォークダンスクラブっていうのがあって。女同士なんだけど、オクラホマミキサーとかそんな簡単なだけじゃなくて、ヨーロッパのいろんな国の踊ろうということ、みんなそれを研究して踊ったりっていうのを、なぜか真面目に六年間やって、楽しく踊ってたな。体育祭で学年ごとに踊りがあるんだけど、高三の時は、剣の舞っていう踊りをするのが、すごいワクワク感。「早く高三になって、踊りたいわ」っていう、そういう学校になっていたのね。今考えると、すごい素直に育ってたんだなって思うんだけど。

高二高三の時には、低学年の人のあこがれの先輩になりたいなって思うじゃない。旧姓は鹿野っていう名前だったんだけど、何人が、「鹿野さーん」って来てくれたか

ら、可愛がってて。私を慕ってくれた後輩だけど、今でもずっと付き合ってる。あと、赤坂だったので、学校の帰り、中華そば食べたとか。学校じゃ禁止されてるんだけど、みんなで食べたり。スリルを感じるような生活をしましたね。

同じだった通学バスが縁となり、主人と出会った

高校生の頃はね、松本清張をよく読んだ。地下鉄の通学でよく読んだなって記憶がある。ずっと読みふけてたし。あとね、『少年マガジン』も読んでた。「あしたのジョー」とか。毎週木曜日を楽しみにして、東大構内を通過する系統のバスに乗って御茶ノ水からの帰り、そのバスに乗る前に、必ず本を買ってバスの中で読むのが高校の時は楽しかったかな。あしたのジョーがやられちゃったら、涙を流すくらい没頭して読んでたってのは覚えてる。御茶ノ水行きのバスってのが、東大構内から駅へ向かうので学生たちが多かったね。中学・高校の時に

そのバスに乗ったんですけど、朝に東大構内始発から乗る人は少ないわけ。二人か三人しか乗らない。その中にうちの今の主人がいました。毎日同じバスに乗って通っていたので、それが縁で結婚することになりました。それが出会いかな。

短大で教わったことは、今にもずっと繋がっている

短大は、山脇に入ったんですよ。本当はどっか受けようと思っただけど挫折して、短大までエスカレーター式で行っちゃえばって。食物科に入ったら、二年で卒業すれば栄養士の資格が取れたのよ。それから教職課程の二級とかいうのが取れて、せっかくだからそれを取ったの。家庭科の先生。中学生しか教えられないってやつだけ。短大のときは食物科だったから、いろんな料理を覚えたり教わったりするから、それがやっぱり今にもずっと繋がってる。デスクワークは全然好きじゃないから、作ったりするのが楽しかった。

歯科衛生士の資格を取って、結婚した

今からの女性はね、自分の手に職を持たないといけな
いと思って。栄養士の資格を持っているけど仕事になら
ないし。主人が歯医者さんの学校に行くってことになっ
たから、歯科衛生士さんになったらいいかなと思つたの。
そうしたらうちの父親が、「いいんじゃない」って言つて。
神田に、一年間で資格を取れる学校があつて、入学しまし
た。年齢が一八から三〇過ぎまでの人が来てて、それは
それでまたいろんな社会を勉強できて、面白かつた。そ
れで、衛生士を取りました。そして、歯医者さんに勤めた
の。一一カ月勤めて、二月でやめて、四月に結婚しちゃつ
た。でもその一一カ月の間に、先輩に怒られるのに耐え
忍びながらも、なんとなく身に付いたものが、歯医者さ
んを開業するにあつてすごい役立っていたわけ。

開業を求められ、三二年前に陸前高田に来た

主人の家の三代前の先祖が、今でいう陸前高田市の気
仙町から出ていって東京で産婦人科を開業した。その次
の代が、うちの主人のお父さん。結構遊ぶのが好きだか
ら、高田にしよつちゅう遊びに来たの。それこそ震災前
でしょ。海はあるし、川はあるし、夏は必ず来た。秋は
鮭が昇ってくるので必ず見に行つたり、そういうポイン
トポイントで遊びに来てたの。「いいよなあ高田って」っ
て思つてたわけね。親戚で仲良くしてる人がいて、毎回、
そこのお宅でお泊りしてたの。結婚して四年ぐらいたつ
た時に、「開業しようかな、どうしようかな」ってそのお
じさんに話したら、「こつちで開業してくれないか」って
言われたの。「なんで」っ尋ねたら、今は、歯が痛いとし
三カ月待つと。痛いんだけど歯医者に予約すると、「三カ月
後ですよ」って。そうすると、こんなに小さかつた虫歯
が大きくなつたりするじゃない。今みたいに予防の情報

が少ないから。それで「みんな困ってるから、こつちで開業してくれば本当に嬉しいんだけどなあ」って。うちの主人と話し合いをしたんだけど、「歯医者が入ってきてくれたら嬉しいんだよ、みんなが助かるんだよ」って言われた時に、やはり医療ってのは求められたところに行くのが一番いいんじゃないかって思って、「じゃあ高田に行っちゃおうか」、なんて感じてここに決めたの。歯科衛生士は持つてるし、栄養士も持つてるし。三二年前、昭和五七年の七月の末に、主人と私と生後三カ月の子どもと東京から出てきて、そして今に至る。

陸前高田は、子どもが育つのにすごく良い環境だった

今は津波に流されてなくなってしまうたけれど、海そばから歩いて五分ぐらいのバイパス沿いに家があったの。吉田の三代前の先祖が、東京に行ったじゃない。東京行った人たちが、「東京から帰ってきた時にみんな帰れる場所を作ろうじゃないか」って、みんなで松原に土

地を買ったわけ。そこに夏の家を建てて、高田に来た時はそこに住み始めたわけ。家の前に曲松公園があって、子どもが家から勝手に出ても、車の通らないところだったし、それでトトトって公園に行って遊べる。本当に子どもを育てるのにすごく良い環境だったの。裸足で遊べるし、みんなが公園に来るから、自然に公園デビューできたし、っていう場所だった。うちの子どもは、そこで育った。

幼稚園前まではそこにいたんだけど、四歳になった時に鳴石団地が造成されて、上下水道完備の土地が区画されたわけ。東京に暮らしてた人って、上下水道完備が当たり前でしょ。曲松の家にいた時は、汲み取りなわけ。うちの主人が水が流れるやつに改造してたので、チャップンじゃなかったけど、そういうの嫌でしよってなつたら、ここに移ろうって。家を建てようって、鳴石団地に家を建てたの。それが二八年ぐらい前。そっからうちの子どもは幼稚園に通うようになったの。それがよかった。今回津波で助かったの。松原にもしいたら全部だめだった

た。だからそれは、すごい良い選択だったと思ってる。

子どもを中学からは全寮制の東京の学校へ行かせた

子どもは小学校まで高田にいたんだけど、勉強する環境が足りないの、どうしようかと。ファックス予備校ってのがあって、ファックスで勉強やつたりとかしたんだけど、私立のいいところなんか受けられるわけないよ、その程度じゃ。だから、東京におばあちゃんたちがいるし、東京の学校に行かせたいということになって。たまたまエレベーターで会った奥さんが、「東京に、秀明学園っていう全寮制の学校があるのよね」って。「ええ、そんなあるんだ」って言って、面白いなって思ってた家に帰ってきたら、その学校のダイレクトメールがちょうど来たの。あの人が送ってくれたのかなって思うぐらいのタイミングの良さだったの。説明会があったので、家族で行ったら、結構、気に入って。学園長の話がすごく良くて、この人に子どもを預けてもいいんじゃないかって思える

ような人だったのね。私たちは、週末とかに東京に行って、会ったりご飯食べたりって、コミュニケーションをちゃんと取るようにした。週末は帰れる学校だから、おばあちゃんのところに行って、おばあちゃんのご飯を食べて、っていうのを六年間。

大学を卒業して戻ってきて、今は一緒に仕事を始めてる

そして高校を出て、大学なんかも私は何もわからないから、自分の道だから自分で考えなさいって。子どもも自分で考えて、日本大学の歯学部に入った。えらいなって思ったのが、九倍ぐらいの倍率があったんだけど、それを突破して、自分で選んで慶応の研修生になったこと。骨の研究を四年間やり続けた。それが三月の末で終わるって時に震災が起きたの。うちの主人、震災後にすぐにここに仮設を建てたの。五月の一日、二日には開業できたのね。だから、息子も戻ってくるってことになって、去年戻ってきて、今一緒に仕事を始めてる。

夢なら覚めてくださいって思った

ほんとにね、地震が起きた時にね、「夢かな、夢なの」って。何も変わっていないんだよ、家の周りは。でも、何が起きたんだろうって。もちろん地震が起きた時は私は山の中だったんだけど、家に戻って、みんな無事で。家も無事でしょ。だけど、うちの歯科医院が海の近くだったから、主人が「ちょっと下見てくるね」って言って。すぐ帰ってきたの。「どうしたの」って言ったら、「行けないんだ。全然下に行けない。何が起きているか俺もわからない」って。「夢なら覚めてください」って思ったわね。それは一番最初に思った。

みんながうちでコミュニケーションをとれた、りくカフェの原点

避難所に大量に支援物資が来る。そういうときはね、みんなが一斉に来ちゃいけないから、まず全部並べといて

周りながら一個ずつとってもらって、やってたんだって。

そういうの聞いたときに、うちは実家が東京だったってのはすごくよかったの。支援物資を送りたいけど、どこに送ったら確実に被災者に届くかわかんないじゃない。そこで、「鹿野だ！」って。電話がついた途端に「何が欲しいの」って電話がきて、みんなに聞くと、「ズボンが欲しい」だの、「モモヒキが欲しい」だの。そういうのをみんなね、欲しがつてると伝えた。物資が届くでしょ。「ズボン、来たよ」と言うと、その人が取りに来て。夏になると、ある人が、「扇風機、いるんじゃない?」「扇風機が欲しいらしい」って言うと、七〇台も八〇台も毎日、扇風機だけが届くの。あと、冬になるとコタツが欲しいってなって。「コタツが欲しい」って言ったら、またそれも二〇台ぐらいボンって来て、置けないじゃない。だからもう玄関ってというか庭の先に置いて、予約した人から取りに来てもらう。その頃はだいぶ落ち着いてきたからそうできたけどね。初めの頃はね、これなんだっけ、あれなんだっけ、どうする、ああするってなって、それでみ

んながコミュニケーションを取れたわけ。それがりくカフェの原点。今考えると、楽しいけど大変だったね。でもみんなが喜んでくれたからね。

震災を経て、堅い絆で結ばれた

鳴石でね、ご近所付き合いは震災のおかげでほんとに良くなったよ。同じエリアに住んでる八軒分の支援助資が来るわけ。それを私がね、四月に班長だったので毎日「荷物が来ましたよ」って言うと、みんなで力を合わせて取りに行って、「はいこれ五〇〇グラムずつだよ」ってみんな毎日分けていたわけ。そしたらすごく仲良くなった、今でも堅い絆で結ばれた感じはあるな。コミュニケーションを自然に取らざるを得ないんだ。でもりくカフェに海外の人が来た時に、なんでそういうことができるんだろうって。ドイツの人だったんだけど。「ドイツでは、もしこんなことが起きたらどうするんですか」って聞いたら、国から支援されるのを待ってるって。私たちには、

もしも誰からも来なかったら家にあるものをみんなで分けたり、「私、それあるよ」とか言って、食べれるような関係があるじゃない。それがね、アンビリーバブルだって。国によって違うのかなって。

りくカフェでいろんなものが繋がる

りくカフェの面白いのは、こうやっていろんな人が来ているんな話が盛り上がる場所。たまたまりくカフェに来て、初めて会うでしょ。例えば、「大阪でどこそこに行っただですよ」「私もどこそこに行っただよ」「え、ウソ！」って、そのくらい身近な関係ができてること。がこの中でたくさんあった。あと、「仮設に暮らしてるけど」と言って、「やだ、おんなじ仮設じゃないの」って、ここで話してる人もいたし。なんかここで、いろんなものが繋がるっていうことがたくさんありました。あと、「今日はアメリカから来た」「え、私もアメリカから来たんですよ」って人がいたりした時には、「今日はまたおもしろ

「い日だね」って。あとは、すぐ帰ろうと思って来た人が、ずっとお尻に根が生えたようにいられる場所。それくらい、居心地の良いスペースみたいだね。それはこの三角形の屋根の形とか、木の温もりがすごい力を出してる。住友林業さんの方が言うには、「この木の形と木の温もりはいろんな想像力と発想力を生み出してる」って。これがもしもコンクリートだったら絶対こうはなんない。りくカフェに来て楽しいなって思ってたくれる人がいたら、それが楽しいの。

陸前高田に時々来て、伝えていくことが大事

大事なのは、時々来るってこと。来てくれて、「ああここ、こんなに変わったんですね」っていうのをちゃんと実際に、目で見て、それを大阪に帰って、「陸前高田行っただけどうだったわよ」って現実をちゃんと目で見た人が伝えていくってのが、これから大事だと思う。私たちが言うよりも、他の人たちが見に来て、それを伝えるってこ

の方が良いってわかっているの。あと、いろんなイベントがある時に「僕たちができることあるかな」って思ってきてくれること。後輩にもどんどん受け継いでく。会社で「みんなで行きましょう」っていうのを促す役になるとかもね。それで地元で食事するのが支援なんだ。りくカフェでコーヒー飲んで帰るのも支援の一つでしょ。全国の人が続けるってところは、そういうのに繋がってるのかなって。メッセージを残しながら、フェイスブックでも、いろいろ情報も見て、「そうなんだわ」って思いながら、「じゃあ今度行こう」って思ってください。忘れないで。

【聞き手の一言】

私は、陸前高田市でりくカフェを経営している吉田和子さんに聞き書きをしました。吉田さんはりくカフェの

面白いところを、いろんなものがつながっていくことだと言っていました。私が吉田さんに聞き書きできたのも、つながりがあったからです。つながりを大切に、またりくカフエに立ち寄りしたいと思います。ありがとうございます。

今田 葵

タイトル

関西大学商学部 長谷川ゼミナール二〇一四年度聞き書き作品集

医療は求められたところに行くのが一番いいと思って、陸前高田に来た

話し手

吉田 和子さん

聞き手

今田 葵

発行年月日

二〇一六年七月三十一日 第一版 発行

発行者

関西大学商学部 長谷川研究室

〒五六四八六八〇

大阪府吹田市山手町三十三三三五

e-mail: shin@kansai-u.ac.jp

URL: <http://www2.itc.kansai-u.ac.jp/shin/>

: <https://www.facebook.com/kandai.hasegawa>

©2016